

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 文章・談話研究

宮澤 太聡

文章・談話研究として、2023年に刊行された書籍から研究動向を確認する。2022年の終わりに公開されたテキスト生成AIのChatGPTは、すでに大学のレポート課題作成や小説執筆に活用される(できてしまう)レベルとなっており、人間が表現すること、理解することの意義が改めて問われている状況にあるといつてよい。ここでは、表現研究の観点から重要だと思われる3冊を取り上げる。

①文章作成に関する研究：『日本語学』冬号(明治書院)の特集「文章を書く教育」に代表されるように、文字によるコミュニケーションの中でも「表現」についての関心が高まっている。石黒圭『ていねいな文章大全』(ダイヤモンド社)は、「ていねいな文章」の四条件を挙げ、媒体や目的によって「ていねい」の基準が変化することを様々な事例を取り上げながら論じる実践的な表現の教科書といえる。特に、テキスト生成AIに対する筆者の立場が明確に示されており、人間が人間に向けて書くことの意義を考える上でも示唆に富む。

②文学作品の文章研究：山本貴光『文学のエコロジー』(講談社)は、「文芸作品のエコロジー(生態系)をコンピュータでシミュレーションモデルとしてつくってみる」(p.029)という立場で、様々な文芸作品を用いてエコロジーの分析観点を提示し、文学作品とシミュレーションの比較から、作品内世界の膨大な要素が「省略」されていると論じている。ただ、「文学作品は言語によって組み立てられており、そこには作品内世界の一部が表現されている。」(p.377)とあるように、シミュレーションモデルによってエコロジーを観察するという方法では、膨大な「書かれなかったこと」よりも、掬い上げられた「書かれたこと」の価値が相対的に高まると思われる。さらに、「テキスト生成AIは、機械学習の材料とした文章において、文字が並ぶ確率を処理しているだけであり、現実の世界や小説に描かれた世界について、そこにあるエコロジーを扱っていない。」(p.404)という議論は、人間が文学作品を理解するということを考える上で重要な指摘だと思われる。

③方言学の談話研究：方言学の世界に語用論を取り込むことを目指しこれまでの研究成果をまとめた小林隆『語用論的方言学の方法』(ひつじ書房)は、「語用論的な考察は、必然的に人間の思考の問題に踏み込むこととな」(p.v)るとし、日本語の方言学において手薄であった運用面の研究の必要性を訴えている。文章・談話研究に最も関連するのは、第10章から第12章で、依頼・受諾の談話を対象に、「言語発想法」の地域差によって、談話レベルでの表現が異なると論じており、興味深い。

本稿は、稿者の関心をもとに成果を取り上げたため、扱えなかったものも多い。今回取り上げた3冊は、それぞれ研究分野は異なるが、「人間」を積極的に組み込んだ学問分野の開拓・研究方法の検討という点で共通しており、今後の展開が期待される。

(中京大学)